

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介しています。執筆者は山田史談会長の佐藤仁志さん（豊間根・74）です。

幸子（カウ）は、明治33年6月30日紫波郡不動村（現矢巾町）に生まれました。大正8年3月岩手師範学校女子部を卒業し、久慈尋常高等小学校訓導として赴任。翌9年12月花巻町の西塔庄太郎と結婚、10年に中野尋常高等小学校へ転任し、長女房子を出産した。同年12月磯鶏尋常高等

大正14年3月、夫庄太郎とともに山田尋常高等小学校へ転任、翌年4月山田実科高等女学校教師嘱託となる。山田の人たちと交流し数多くの歌を詠み、幸せの日々を過ごした。「縫ひ終へて外に出れば網を引く聲は夜空を渡り来にけり」の歌がある。昭和2年3月、二升石尋常小学校へ転出、押角峠で「九十九折る山路を越えて乗る馬の ゆきなづみつ つ日は暮

学校で開催された山田線開通祝賀会に幸子が招待され、その時の歌を詠んでいる。そのむかし 吾が教鞭をとりける この學舎に 来る嬉しき 硝子戸も 壁も柱も なつかしく 一つ一つに ものを言いたし 天つ日は 光りがやき 町人の 歓呼のなかに 汽車開通す 幸子は「歌と私」の結びに「私は今後如何なる境遇に生きようとも、歌によって心だけは純情でありたいと希つております。貧しくとも、恵まれずとも小学教師の貴き天職に身を捧げてまいります」と結んでいる。昭和12年9月、薄幸の歌人西塔幸子の遺稿歌集『山峡』が出版された。金田一京助博士は序文に「草深き北奥の山村僻地に訓導として、また母、妻として人間として美しくも痛ましい、尊くも悲しい純情の結晶」と述べている。

薄幸の歌人 西塔幸子

れにけり」と詠んでいる。

昭和6年沼袋尋常小学校、9年江繋尋常小学校に転任、同年9月7日には仙台放送局から教育者の体験談を放送している。11年5月体調を崩し岩手病院に入院、31日四男を出産、6月22日心臓衰弱、呼吸困難となり、14歳以下7人の子を残し母弟妹に看取られつつ不帰の人となった。享年37歳。昭和10年11月17日山田小

町中央公民館の公園広場には「あきらむと人には言へどはかなかり 吾がいつはりに 泣きたき心」と刻んだ歌碑がある。



町中央公民館脇にある幸子の歌碑

町長室から

東北地方は梅雨明け宣言のないまま盃蘭盆を迎えました。八月中旬を過ぎても曇り空が続く稲作への影響が心配されています。帰省客にとっても思い切りふるさとの夏を楽しみたかったのに、と残念な思いでお帰りのことでしょうか。▼そんな中、甲子園での花巻東高校の大活躍は一服の清涼剤でした。強いだけでなくひたむきにプレーする姿やピンチでも笑顔が絶えないベンチなど、他のチームが教えられることも多かつたのではないのでしょうか。また、選手が県内出身者だけと聞き、野球留学で全国から選手を集める高校が多いなかで感激もひとしおでした▼県立山田病院の内科医不在の現状に対して多くの皆さんからご意見をいただいております。町としても県に對する要望を継続しながら町独自でもインターネットを活用して全国の医師の皆さんに呼びかけをするなどの取り組みを始めます。

山田町長 沼崎 喜一